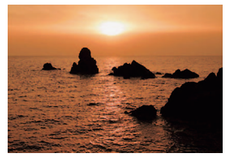
元号が明治に改められて、今年で150年。南越前町では、以下の施設で企画展を開催しています。

企画展 北前船主九代目右近権左衛門
―幕末・明治の右近家―

【開催時期】9月29日(土)～11月25日(日)　【場　所】北前船主の館右近家
【内　容】右近家は、江戸中期から明治中期にかけて北前船主として活躍し、日本海五大船主のひとつに数えられる家です。河野の企画展では、幕末・明治期に北前船主として躍動し、右近家の中興の祖として評価される九代目右近権左衛門の活動を、右近家に伝えられた古文書や歴史資料を展示しながら紹介します。

ここでは、九代目右近権左衛門(権太郎・廣隆)の概要と権太郎ゆかりの歴史資料の一部を紹介します。



㊨坊さん礁と夕日
㊤北前船主の館右近家

九代目右近権左衛門(権太郎・廣隆)

九代目右近権左衛門(幼名は権太郎・諱は廣隆)は、文化13年(1816)8月25日に生まれました。17歳にして船に乗り込み、その後、八幡丸や小新造の船頭を務めました。

権太郎は幕末・明治にかけて北前船主として右近家の持船を飛躍的に増加させました。権太郎が生まれた文化13年の右近家の持ち船は、わずか1、2艘でしたが、明治18年(1885)ごろには21艘に達していました。その持船には権太郎の兄弟・息子・娘婿といった一族が船頭を務めていました。幕末・明治期の北前船主・右近家は権太郎とその一族が築き上げたといえるでしょう。

九代目右近権左衛門(権太郎・廣隆)1816～1888

権太郎は明治15年(1882)に隠居し、明治21年(1888)1月16日に亡くなります。行年72歳。右近家墓廟にある墓碑には「中祖」と刻まれており、右近家中興の祖として評価される人物でした。また、右近家の拠点であった大阪の一心寺には、「右近廣隆翁之碑」があります。この碑は、権太郎と親交のあった人々によって建てられたものです。有志者は100人を超えており、権太郎の交友の広さがうかがえます。

「諸国日記控」と「永福帳」
―権太郎が残した帳簿―

右近家には、右近権左衛門家文書という文書群があります。総点数約2万点に及ぶ大文書群で、右近家や河野の歴史を明らかにしてくれる貴重な歴史遺産です。

そのなかに、「諸国日記控」と「永福帳」という帳簿があります。これは、権太郎が30代の時に記した帳簿で、権太郎の活動がうかがえます。

2冊の帳簿を分析した原直史氏によれば、権太郎の航海には次のような特徴があります。一つはオタルナイ場所やマシケ場所といった北海道の漁場に各年度1度か2度は行っていることです。ここから、権太郎の船が北海道の漁場に入り込んでいたことがうかがえます。もう一つは、他の北前船と比べて北海道と本州の間をかなり多く(多い年は1年に3回ほど)運行していることです。これは敦賀を拠点としている右近家ならではの特徴といえます。この運行によって、莫大な利益を生んだことでしょう。

知工箪笥

船内で書類入れと机として利用した箪笥です。引き出しの裏には「越前国南條郡河野浦右近権左衛門権太郎、此天保九戌年求之」とあり、権太郎が天保9年(1838)に買い求めたことがわかります。

右近家の帆印

帆印とは船を識別するための印のことで、木綿帆が普及した17世紀以降に用いられるようになったといわれています。右近家の船には、帆印がないのが特徴で、これが右近家の船と識別されていたと考えられます。

北前船主の館右近家
南越前町河野2－15　☎48－2196
受付時間：午前9時～午後4時
(定休日：水曜日)
入場料：高校生以上500円、小・中学生300円、小学生未満無料

企画展 宿場町・鉄道のまち今庄

【開催時期】9月21日(金)～10月21日(日)　【場　所】昭和会館
【内　容】今庄は江戸時代に宿場町として繁栄し、明治時代には、鉄道のまちとして発展を遂げました。今庄の企画展では、幕末・明治期の今庄に関する建造物や古写真を写真パネルで紹介しています。

ここでは、企画展のプロローグとして、越前屈指の宿場町であった今庄宿と今庄の象徴たる京藤甚五郎家、旧北陸線トンネル群、山中トンネルについて紹介します。

越前屈指の宿場町　今庄宿

今庄はかつて北国街道の宿場町として賑わい、今もその面影を残します。今庄宿は江戸時代初期に、初代福井藩主・結城秀康が主要な宿駅のひとつとして整備しました。幕末の記録によると、旅籠55軒、茶屋15軒、酒屋15軒などがあり、大きな宿場であったことがうかがえます。今庄宿にある町家は、「平入り」(正面から屋根面が見える形)の建物が多く、町家のなかには太い登り梁があり、今庄の豪雪に耐えるためと考えられます。

京藤甚五郎家

京藤甚五郎家は天保年間(1830～1844)に建てられた建造物です。京藤甚五郎家は江戸時代に酒造業を営んでおり、脇本陣格の家でもあります。福井県内に残る町家では最古級のものです。屋根には火事の際に隣家からの延焼を防ぐための卯建が上がり、外壁は全面塗籠しており、強い防災意識がうかがえます。

京藤甚五郎家の柱には刀跡が残っています。これは幕末の元治元年(1864)12月9日、武田耕雲斎率いる水戸天狗党の浪士が京藤甚五郎家に宿泊した時に切り付けた刀傷と伝えられています。

平成22年(2010)に県の指定有形文化財となっています。

京藤甚五郎家文書

今庄宿は文政元年(1818)に大火に見舞われ、京藤甚五郎家も焼けました。写真の帳面はこの時に作成され、表紙には7月13日八ツ半(午後3時)に出火したことを記しています。

▲文政元年 火事見舞扣帳

旧北陸線トンネル群

敦賀―今庄間にある旧北陸線トンネル群は、明治29年(1896)年に開通し、昭和37年(1962)の北陸トンネル開通まで鉄道路線として利用されていました。

廃線後は自動車道に転用されますが、隧道(トンネル)やロックシェッド等が随所に残っており、それらは国の登録有形文化財となっています。

山中トンネル

山中トンネルは旧北陸線トンネル群の一つです。長さは1170メートルに及び敦賀―今庄間のトンネル群のなかでは最長です。山中峠の下を貫いており、旧北陸線トンネル群のなかでも、難工事の末に竣工したと言われています。

山中トンネルの横には行き止まりのトンネルが存在します。これは多くの車両を繋いだ機関車を折り返すためにつくられたもので、折り返すだけなので、行き止まりとなっています。

山中トンネルにあった石額

長浜―今庄間の主要なトンネルには石額が掲げられており、写真は山中トンネルの今庄側にあった石額です。「徳垂後裔」と刻まれており、黒田清隆が記したものです。石額は取り外され、長浜鉄道スクエアに展示しています。

山中信号所跡(スイッチバック跡)

山中信号所跡には、スイッチバック跡が残っています。

スイッチバックとは、単線で急勾配の線路において、列車往来のため考えられたシステムです。列車の折り返し線と待避線路を併せ持ち、急勾配の途中で、平坦な引き込み線を設け、通過列車を行き来させました。

昭和会館
南越前町今庄75－6　☎67－0280
受付時間：午前10時～午後4時(土・日および企画展開催中のみ開館)
入場料：無料